Program

プログラムと曲目解説

プログラムノート 田名部 有子

I

1. カッチーニ ／ 朝川 朋之 編：アヴェ・マリア

キリスト教の聖母マリアを祈祷する意味を持つ、“アヴェマリア（Ave Maria）”。グレゴリオ聖歌に始まり30人以上の作曲家がこれを題材にした作品を作っています。物憂げな下降系のゼクエンツがなんとも美しいカッチーニのアヴェ・マリアは近年になって広く知られるようになり、現在ではグノー、シューベルトに並び、広く演奏されています。今日は須川先生のために独創的なアレンジがなされたものをお聴きいただきます。

2. J.S.バッハ ／ G線上のアリア

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）の名曲中の名曲。『管弦楽組曲第3番』BWV1068の第二楽章「アリア」がヴァイオリンソロに編曲され、G線だけで演奏できることから後世になってこの題名で呼ばれるようになりました。サクソフォン四重奏で演奏されることも多く、吹奏楽少年だった高校生時代の須川先生が、来日したダニエル・デファイエ サクソフォン四重奏団のこの曲の演奏を聴いて、クラシックサクソフォンの魅力に目覚めたというエピソードもある一曲です。

3. 吉松 隆 ／ ファジーバードソナタ
第一楽章 run bird 第二楽章 sing bird 第三楽章 fry bird

異色の経歴ながら今や日本を代表する作曲家の吉松隆（1953-）によるサクソフォンのためのソナタ。22年前の1991年に須川先生によって委嘱された作品で、吉松氏の「鳥シリーズ」の1つでもある。
当時、比較的新しい楽器であるサクソフォンにはオリジナルの曲が少なく、新しく作られる曲は前衛的なものがほとんどでした。現在では一般化されているボーダーレスという感覚もまだ広まっていなかった時代に、調性のない前衛音楽に異を唱え古典から民族音楽・プログレ、さらにはジャズまでものジャンルの垣根を越える吉松氏の作品は、須川氏の同タイトルのCDによって一躍話題の作品となり、今では世界中で演奏されているサクソフォンの代表作です。第一楽章「run bird」はCとGを土台とし、心地よい変拍子を駆け抜けるallegro vivace。スラップタンギングやフラジオなどの特殊奏法も調性の中で実に鮮やかに使われています。第二楽章「sing bird」は民族音楽的なC・E・Gの保続低音（ドローン）の上でしなやかに奏でる歌。第三楽章「fry bird」序奏からprestoへ。そっと目を閉じて、ライブならではの「飛ぶ鳥」の副題そのままを感じていただきたい。

4. A.ピアソラ ／ リベルタンゴ

アルゼンチンの作曲家アストル・ピアソラ（1921-1992）が1974年に発表した作品で、自由（libertad）とタンゴを合わせた造語である。今ではフィギュアスケートの楽曲に頻繁に使われるほど有名なピアソラですが、ピアソラ満載のアルバム「cafe1930」の発売時（1995年）は、まだピアソラは一般に有名ではありませんでした。後に、ヨーヨー・マなど数多くのクラシック演奏家が取り上げることになるピアソラブームの先駆けとなったCDから1曲お聴きいただきます。

5. J.ガーシュウィン ／ 挾間 美帆 編曲：「すべてを知っている場所」からの便り
——ガーシュウィン・メロディーズ

クラシックとポップス両方の語法を持ち、ラプソディーインブルーなど数多くのヒット作を生み出したジョージ・ガーシュウィン（1898-1937）の名曲を、新進気鋭の作曲家挾間美帆さんがアレンジした作品です。第二次世界大戦が起こる直前の1930年代は世界恐慌や人種差別など様々な問題があり、そうした中、ガーシュウィンの活躍していたニューヨークは、文化の中心として発展していました。このタイトルには、そんな場所から生まれた音楽の数々を感じて欲しいという編曲者の願いが込められています。

〈休　憩〉

II

1. P.スパーク ／ パントマイム

パントマイム・・・金管バンドが非常に発展しているイギリスの作曲家フィリップ・スパーク（1951-）による、ユーフォニアムとブラスバンドもしくはピアノ伴奏のために書かれた作品。1986年に作曲されました。パントマイムの意味は日本と違い、イギリスでは主にクリスマスに子供向けに演じられる伝統的なコメディの演劇のことを指します。名手のために書かれたので広い音域や早いパッセージが技巧的に難しく、コンチェルト的な要素を持つ。曲はAndante SempliceからCadenzaを挟んで、10/8拍子のAllegro Vivaceへ。テナーサクソフォンから醸し出される様々な顔を楽しんでいただけたらと思います。

2. F.プーランク ／ トリオ 第一楽章 Presto 第二楽章 Andante 第三楽章 Rondo
● ソプラノサクソフォン：須川 展也　テナーサクソフォン：田名部 有子

今年が没後50年となるフランシス・プーランク（1988-1963）が、27歳の時に発表したピアノとオーボエ、ファゴットのための三重奏曲。スペインの作曲家マニュエル・デ・ファリャに捧げられている。
第一楽章は荘厳なレントの序奏から2拍子のプレストへ。変ロ長調の第二楽章はアンダンテのたおやかなメロディが美しい楽章。長調から短調へ、近親調そして遠隔調へ和声が揺らめきます。第三楽章　8分の6拍子の快活な終楽章は、ピアニストが主役と言ってもいい伝統的なスタイルによって書かれたロンドです。

3. 長生 淳 ／ パガニーニ・ロスト
● 1stアルトサクソフォン：須川 展也　2ndアルトサクソフォン：田名部 有子

長生淳（1964-）は東京藝術大学・大学院出身の作曲家。知的な作風で、テレビなどのメディアや吹奏楽の世界でも人気を博し、また須川氏との親交も深く15年近くにわたり多くのサクソフォンのための作品を残しています。
パガニーニ・ロストは、パガニーニの主題（ヴァイオリンのための24のカプリス終曲）を使って、という須川氏の依頼により委嘱された作品です。
ブラームスやラフマニノフなどがこの主題を使った変奏曲を残していますが、この作品は「Lost」の通り主題がわかりやすい形では現れてきません。喪われ、点在するカケラを掴み、音の嵐の中それを追求していく音楽と、須川氏の音楽を追求していく求道心を重ね合わせています。
旋法的で謎めいたピアノの序章から、2つのアルトサクソフォンがぶつかり合っていきます。